

# 東方幸生録

東方project大好き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

どこにでもいる引きこもり派の高校生「如月 蒼夜」が神（笑）の失態で、この世から存在が消えてしまう。そこで神は、蒼夜を東方Projectの世界に転移させることにした。一体どのような第2の人生を歩んでいくのか、そして、東方キャラと、どういう関係を作っていくのか！

# 目次

- 1 突然の世界からの拒絶　そして旅立ち



# 突然の世界からの拒絶　そして旅立ち

俺の名前は「如月　蒼夜」。どこにでもいる普通の高校生だ。

ただ一つだけ普通じゃない所があるとすれば、友達が少なすぎる引きこもり派の間だ。

ついでにコミュニケーション力0だ。自慢にもならないが・・・。

今日もいつも通りの何気ない生活が終わろうとしている。俺は今、家への帰路をたどっている。あと数分もすれば、俺の家に着く。

そんなことを考えながら、近くのコンビニを通り過ぎようとすると、店の中から、

「強盗だー!」

と、叫び声が聞こえてきた。驚いて、コンビニのほうを向くと、店の中に、あの有名なアニメ、「名探偵コロン」の犯人として出てきそうな、黒い服を着た人がナイフを持って店の中の人を脅していた。俺はいてもたってもいられず、店に走って黒い服を着た犯人（通称犯人）にパンチを食らわせた。

蒼夜「くらえ！引きこもり中に頑張つて筋トレして鍛え上げた汗と涙の努力の結晶パンチ！」

無駄に長いネーミングのパンチだが、効果は抜群。犯人は驚いたのか、防御の姿勢はとらず、そのまま壁に激突。

意識を失ったと思ったら、犯人は怒って俺に銃を向けてきた。・・・銃？もう一度見てみると持っているものはやはり銃。・・・オワタ＼（＾o＾）／  
そんなことを考えてるうちに、犯人は俺にお構いなしに、銃を撃つてきた。俺は避ける事も叶わないまま、意識が暗転した。ただ、痛みが来なかったことに不思議を感じたが・・・。

目を開けると、空の上にあった。・・・うん。自分でも何言ってるかわかんない。だって現在俺は空の上に立ってるような感覚だもん。おっと、少々語尾が気持ち悪くなっちゃった。そんな自問自答みたいなことを繰り返していると、後ろから「おい、お主」と、声をかけられた。

ふりむくと、そこには絶世の美女・・・というシチュエーションはなく、代わりに絶世の美女とは遠くかけ離れたおばさんが立っていた。

??「失礼な！これでも昔はぴちぴちだったんじゃ！」

と言っている。ほんとか?と考えるようになった時、ふと疑問が上がった。

蒼夜「おばさん、今俺の心読んだ?」

と、普通の人から見たら変なことを言っているようにしか見えないけど、今俺は、確実に心では思ったことだが、決して口に出してはいないはずだ。

??「その通り。心が読めるのじゃ。・・・って、おばさんではない!神じゃ!」

・・・かみ?k a m i?紙?

神(自称)「自称でもかみでもk a m iでも紙でもないわ!神じゃ!G O Dじゃ!」

息を切らしながらも必死に伝えてくる神。普通では信じられないことだが、心を読んだりしている時点で、人間にはなせる業ではないことが分かっているから、信じざるを得ないのだ。

神「そういうことだ。それよりも、お主には重大なことを話さなければならない。」

さつきとは大違いの雰囲気だったので思わず黙ってしまった。

神「お主は、・・・元居た世界から除外されてしまった。」

蒼夜「・・・は?」

思わず目を丸くする。元居た世界から除外・・・すなわち、存在がなくなった、ということである。

神「理由はな・・・」

く………

神「生命体の名前リストに載っている……お主の名前をコーラで汚してしまつて……世界からお主の存在が……。てへぺろ☆」

蒼夜「無言の怒り！………！！」

神「待つんじゃ！早まるんではない！その代わり、？東方project？の世界に転移させるから！後、儂の不始末じゃから、好きな能力を1つ選んでよいぞ。」

蒼夜「マジか！」

東方projectといえば、俺の数少ない友達に、東方projectのオタクがいた。そいつが言うには、

友オタ「幻想郷という世界が舞台の弾幕シューティングゲームで、キャラも可愛いし、世界観も……」

などと、30分ずつと話してきたから、試しに調べてみたら、すっかりはまつてしまつた。

蒼夜「能力は……？ありとあらゆる力を具現化する程度の能力？でお願いします。」

神「いきなり敬語で。調子のいい奴じゃ。まあいい。その代わり力自体は自分の霊力などだけじゃから、毎日修行をできるだけ怠らないようにしていると、後々楽かもしれぬ。ついでに、お主には、霊力、魔力、神力、妖力を扱えるようにしといたから、第2



の人生、精一杯楽しんで来い！」

蒼夜「ありがとうございます。ついでに時代は幻想郷ができる2億年前にできますか？」

神「しようがないのう。まあいい。そろそろ行く時間じや。もう一度言うが、修業はなるべく怠らないようにな。」

蒼夜「はい！何から何までありがとうございます！じゃあ行ってきます！」

そう言うと、近くの青く光っている扉に飛び込んだ。

どんな波乱万丈な人生を送ることになるのか、蒼夜はまだこの時、知る由もなかった。